

●博士学位請求論文要旨

地域住民との連携・協働により社会資源を開発した ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスに関する研究

社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程
鈴木 智子

1 研究の背景

個人・世帯の課題や地域に存在する社会資源が多様化している現代においては、ソーシャルワーカー等専門職が、それぞれの地域のニーズや資源を見極めながら不足する社会資源を開発していく必要性が高まっている。社会資源の開発は、地域包括ケアシステム・地域共生社会などの政策を実現するうえでも必須の実践である。一方で、各種調査をみると、社会資源の開発に関するソーシャルワーカーの自己実践評価は低い傾向にある。先行研究によれば、社会資源の開発が困難な理由には、職員体制、地域の特性、専門職の経験年数や実践能力、資質向上プログラムの不十分さなどの諸要因が複合的に影響しているが、本研究では、このうち、ソーシャルワーカーの専門職としての能力に焦点をおいて研究を進めていく。

2 研究概要

本研究の目的は、ソーシャルワーカーが地域住民と連携・協働しながら社会資源を開発する際にどのような能力を発揮しているのか、また、どのような契機がソーシャルワーカーとしての能力の向上に影響を与えるのかを明らかにすることである。研究の目的を果たすため、次の研究方法を用いた。

(1) 文献研究（第1・2・3章） 能力研究の歴史や他領域の能力定義、ソーシャルワーカーの専門職としての能力の枠組み、連携・協働による社会資源の開発の歴史、社会資源の開発に関する先行研究、養成教育・現場実践者向け研修プログラムで教示されている社会資源の開発に関する

能力を明らかにするため、文献研究を行った。

(2) 文字テキストデータを対象とした質的分析（第4章・第5章） ソーシャルワーカー・地域住民に対する半構造化面接によるインタビュー調査の逐語録、一部対象者が作成した文書をデータとして、質的データ分析を行った。

(3) 質問紙調査の実施と量的分析（第4章・第5章） 全国の社会福祉協議会及び地域包括支援センターを対象として質問紙調査を実施し、項目分析を行ったうえで、因子分析・共分散構造分析を行った。また、インタビュー調査の結果をもとに、ソーシャルワーカーとして成長した契機に関する質問を行い、能力項目との関連性を分析した。

分析にあたっては、トライアングレーション、主観的情報と客観的情報の収集、メンバーチェックにより、結果の精度を高めるよう工夫した。

3 章立て

本論文は、序章、第1章から第5章、終章により構成され、各章の概要は以下のとおりである。

序章では、研究の背景、研究の目的と意義、本論文の構成・研究の方法、用語の定義を行った。用語の定義について、「地域住民」とは「当該地域に生活基盤を有する、あらゆる立場にある人であり、住民登録のない人、外国籍居住者、災害避難者、短期間居住者、家屋をもたずに路上や店舗などで寝泊りをする人を含む。」と定義し、調査の実施にあたっては説明を簡略化し「その地域に生活基盤を有するすべての人」とすることとした。「ソーシャルワーカー」とは、質的・量的調査の対

象者を除き、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」と、国内外で蓄積されてきた理論・方法に基づいたソーシャルワークを実践する者であり、所属先・一定の資格や養成教育の修了経験の有無、主たる業務の内容は問わないものとした。また、「社会資源」とは、「ソーシャルワーク実践において、利用者のニーズを充足するために活用されるあらゆる資源の総称」であり、本研究においては、ソーシャルワーカーが地域住民との連携・協働により開発した社会資源を扱うため、ソーシャルワーカーが地域において開発することが想定できる「サービス」、「事業」、「活動」、「組織」を対象とした。「連携・協働」については、「共通の目的・目標の達成のために、複数の個人や集団が相互に協力関係を結び、連絡・調整を行いながら活動すること」と定義した。社会資源の「開発」とは、「個人のニーズに対応する資源が地域に不足している場合に、ニーズに対応できる新しい資源を作り出すことを指す。ここには、相応する資源が全く存在していない場合に新たに作り出すことに加えて、既存の社会資源・地域資源をニーズに対応するように改変することも含む」ものとした。

第1章では、専門職の能力に関する概念規定とコンピテンシー・ベースの教育について明らかにした。第1節では、コンピテンシー研究の歴史と現状を、心理学・言語学・経営学・教育学・医学・保健・看護学の領域から明らかにした。各領域の定義に共通するのは、人が能動的に獲得する能力であるということ、また、各職業や社会の要求に応えるために必要な能力であって、それらの獲得によって、職業上求められる目的を果たすとともに、個人や社会のウェルビーイングの実現が目指されているということであった。第2節では、海外における、ソーシャルワーク領域のコンピテンシーや、プロフェッショナルコンピテンシーに包含される要素を確認し、海外ソーシャルワーク領域では、ひとつに定まった定義がないものの、多くの場合、知識、技能、価値、あるいは態度が包含されていることが分かった。第3節・第4節では、海外におけるプロフェッショナルコンピテンシーの定義や国内ソーシャルワーク領域のコンピテンシーの定義、構成要素を明らかにしたうえで、ソーシャルワーカーの

プロフェッショナルコンピテンシーとは、「ソーシャルワーカーの職務上の目的や責務を遂行するため、ソーシャルワーク実践の基盤要素である知識・技能・価値を、効果的・統合的に活用して実践に適用する個人の能力の総体である」と規定した。また、構成要素として、知識・技能・価値、ソーシャルワーク実践行動や個人の内面特性（認知的・情動的プロセスを含む）があることを確認した。プロフェッショナルコンピテンシーとは専門職の能力の全体・総称的概念であり、これを構成する個別具体的な要素としてコンピテンシーがある。これらを本研究における能力の概念定義・構成要素として研究を進めることとした。

第2章では、地域住民との連携・協働による社会資源の開発に関する歴史と理論を明らかにした。第1節では、自治体や社会福祉協議会、その他の相談支援機関に属するソーシャルワーカー等が、地域住民と連携・協働しながら開発してきた社会資源の実践例、社会資源の開発に対する政策や理論上の要請の変遷について、1945年以降の実態を15年単位で振り返った。時代による変化の特徴としては、第一に、社会情勢やニーズの変化に応じて、連携・協働による社会資源開発の意義や必要性が変遷していること、第二に、開発される社会資源の種類についても変遷がみられ社会資源開発の難易度が増していること、第三に、社会資源の開発の担い手となる組織が2000年代以降多様化していることなどを明らかにした。第2節では、地域を対象としたソーシャルワークの理論であるコミュニティ・オーガニゼーション、コミュニティワーク、コミュニティソーシャルワーク、ジェネラリスト・ソーシャルワークと、これを基礎理論とする「地域を基盤とするソーシャルワーク」と社会資源の開発の関連性を明らかにした。社会資源の開発の契機、開発の対象となる主たる社会資源、地域住民との連携・協働のあり方にそれぞれの理論における特徴があることを明らかにした。

第3章では、ソーシャルワーカーの社会資源開発能力に関する先行研究を確認した。第1節において先行研究や実践書をレビューし、社会資源の開発に取り組むうえで着目すべき主要な要素が明らかにされているものの、地域住民との連携・協

働による社会資源の開発に必要な能力が、実践過程に沿って網羅的に明らかになっていないこと、量的調査の実施や演繹的な検証は確認できないことが分かった。ソーシャルアクション、コミュニティワーク、コミュニティソーシャルワーク、マクロ実践との関連でいえば、その実践の一領域である社会資源の開発に焦点化し、より詳細に、コンピテンスの枠組みを用いて活用されている能力を明らかにするのが本研究の立場であることを示した。また、第2節では、社会資源の開発について、ソーシャルワーカー養成カリキュラムや現場実践者向けの研修でどのように教授されているかを明らかにした。

これらの結果を踏まえ、第4章では、地域住民との連携・協働により社会資源を開発したソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスの探究を行った。第1節では、地域住民と連携・協働して社会資源を開発した経験を有するソーシャルワーカー9人を調査対象者として行ったインタビュー調査の逐語録・一部の調査対象者が作成した文書を文字テキストデータとし、質的データ分析法により分析を行った。結果、実践過程にそって、20のコンピテンスコード、8のカテゴリーが生成された。準備段階から発揮されているコンピテンスカテゴリーとして、地域住民と人として向き合い、寄りそい、地域に多様なつなぎ目を増やす、1【つながる力】が確認された。この力は日々の実践において発揮され、以後の展開の礎となっている。また、このコンピテンスは、準備段階のみならず、初期・中間段階においても活用されている。実践の初期段階では、広い視野で課題を把握し、限界を覚知しながらも解決に向けて目をそらさない、2【見据える力】が発揮され、このアセスメント力と解決志向力が、地域住民との連携・協働による社会資源の開発にふみだす起点となる。以後、開発の実現に向けて地域への思い、柔軟性、「まずはやってみよう」の精神、課題を解決する社会資源がひらめく、地域からの相談や提案を受け止めて実現を志すなどの3【志向する力】が、プランニングに際しては、4【構想する力】が活用されている。一方、初期段階における関係構築、中間段階における関係発展の過程では、日々の実践におけ

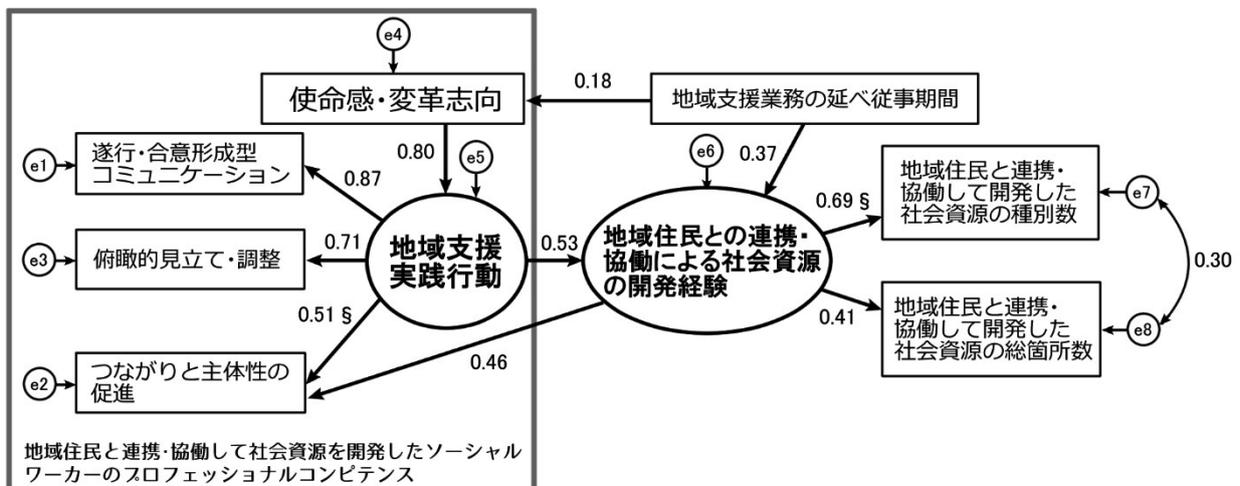
る1【つながる力】を礎としながら、共感と協力を獲得し、情報提供・対話・協働活動により地域の主体性を顕在化させていくという5【促す力】、共に取り組む仲間を増やし、機動力あるベースキャンプをつくる、6【築く力】が発揮され、社会資源の開発に共に取り組む地域住民や多職種との関係構築、連携・協働が深まっている。プランニングした内容を実施する中間段階では、戦略を実行・修正しながら実践を7【継続する力】が発揮され、地域住民との連携・協働による社会資源の開発が実現する。プロセスと結果の評価を行う最終段階では、8【省みる力】が確認された。さらに、8つの力の継続的比較の結果、全てのカテゴリーの触媒としての影響を与えるコンピテンスが、「『専門職としての自己』の着脱」に集約された。この力は、他のコンピテンスの触媒として機能しており、場面に応じて柔軟に専門職としての自己を顕在化させたり、サスペンドさせたりしながら各コンピテンスが発揮されているものと分析した。第2節では、ソーシャルワーカーと、社会資源の開発において連携・協働した経験を有する地域住民5人にインタビュー調査を行い、質的データ分析法により分析を行った。結果、ソーシャルワーカーのコンピテンスに関するコンピテンスコードが11、カテゴリーが7生成された。地域住民は、意味と価値を捉えながらボランティアなどの【活動を続け】ている。このような地域住民は、専門職のかかわりの有無にかかわらず【自ら生み出す】力量を有しており、ソーシャルワーカーは、その活動を下支えする形で連携・協働している。ソーシャルワーカーは、そのような力を有する地域住民からA【信頼される力】を有している。これらの関係性を礎として、地域住民は、住民であるからこそ見える地域のありようや必要な社会資源を【伝え】、一方ソーシャルワーカーはB【受け止める力】を発揮していた。また、ソーシャルワーカーは、地域住民に連携・協働を働きかけるにあたって、地域住民に熱意をもって協力を依頼し、その活躍をC【下支えする力】を有している。なお、これらの実践に取り組むうえで、ソーシャルワーカーの根底には、地域・地域住民と公の境目において両方を理解するというD【境界に立つ力】がある。社会資源の

開発を実現していくにあたり、ソーシャルワーカーにも地域住民にも共通するコンピテンシーとしてE【挑む力】がみられる。これらの関係性や実践行動を礎として、地域住民とソーシャルワーカーは、水平につながり、参加し続けたいと思える場をともにつくる、F【築く力】、地域からの反対や戸惑いを受け止め対策を講じる、G【講じる力】を發揮していた。第3節では、第1節と第2節の分析結果を照合し、共通する実践段階として、基礎となる関係性の構築、アセスメント、開発への志向、構想と戦略、協働と主体性の促進、場とベースキャンプづくり、戦略の実行、評価が見いだされた。また、各カテゴリーの関係性について考察を行い、第2節のカテゴリーは、第1節のカテゴリーの確かさを概ね裏付けているほか、影響しあう関係にあると分析した。第4節では、全国市区町村の社会福祉協議会又は地域包括支援センター1,000か所に在籍するソーシャルワーカーにアンケート調査を実施し、有効回答者400人について量的分析を行った。社会資源の開発者の能力について因子分析を実施した結果、地域支援実践行動コンピテンシーとして「遂行・合意形成型コミュニケーション」、「つながりと主体性の促進」、「俯瞰的見立て・調整」が、内面特性コンピテンシーとして「使命感・変革志向」

が抽出された。また、共分散構造分析の結果、図1のとおり、「使命感・変革志向」が「地域支援実践行動」に影響しており、地域支援実践経験の期間の長短よりも、固有の内面特性や実践行動の發揮が、社会資源の開発経験に影響するというモデルが構築された。また、コンピテンシーの得点の平均値を比較したところ、専門資格の保有の有無、年代による差はほぼなく、所属組織の違いの影響が大きいという結果となった。

第5章では、地域住民との連携・協働による社会資源の開発に必要な、ソーシャルワーカーの能力の向上の契機を検討した。第1節では、実践段階別の教育・研修等能力と本研究結果の対比を行い、各段階において、養成教育や研修では指摘されていない、あるいは指摘が少ないコンピテンシーが明らかになった。第2節では、第4章第1節において調査対象としたソーシャルワーカーに対してインタビュー調査を行ったうえで、ソーシャルワーカーとしての能力向上の契機に関する項目を設定し、第4章第4節と同一の量的調査において質問を行った。因子分析により「能動的な学びと実践」・「就労者としての努力」・「多様な経験の実践への反映」が抽出され、能力向上の契機の変化は「就労者と

図1 地域住民と連携・協働して社会資源を開発したソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンシモデル [共分散構造分析の結果と範囲の設定] (N=400 標準化解)



※プロフェッショナルコンピテンシの枠組みは、仮説モデルと共分散構造分析の結果を照合して筆者が設定したもの。

$\chi^2(10)=13.347, p=.205, GFI=.991, AGFI=.975, RMSEA=.029, CFI=.997$

§: モデル識別のため制約を加えた箇所 他の係数は全て $p < .001$

筆者作成

しての努力」に最もよく表れるという結果になった。共分散構造分析の結果、能力向上の契機が最も強い影響を与えていたのは、「使命感・変革志向」であった。これらの結果を踏まえ、考察において、これまでの研究結果を反映させた、現場にいるソーシャルワーカーへの育成の提案、日々の実践において省察を促す支援について検討し、提案を行った。

終章では、結果を振り返るとともに、以下の8点について考察を行った。

(1) 地域住民と連携・協働しながら社会資源を開発するまでの段階とコンピテンシーについて、本研究の結果と先行研究を対比しながら、本研究の特徴を確認した。

(2) 質的分析の結果、限界を覚知しながらも解決に向けて目をそらさない、【見据える力】が見いだされたが、この力はアセスメントから社会資源の開発に向かう原動力となること、今後、より多くのソーシャルワーカーが社会資源の開発に取り組んでいくには、既存の制度・自身・組織のみの活用では「限界」があるという事実を覚知し、それでもなお、解決に向けて目をそらさない、という視点・姿勢を育んでいく必要があることを指摘した。

(3) 「使命感・変革志向」の重要性と、ソーシャルワーカーの志向を育む省察への支援の必要性を再確認した。この内面特性は、地域支援実践行動に強い影響を与え、それら固有の実践行動が社会資源の開発経験に影響していた。また、ソーシャルワーカーの能力向上の契機である「能動的な学びと実践」・「就労者としての努力」・「多様な経験の実践への反映」は、「使命感・変革志向」の変化に強く影響していた。この結果によれば、社会資源の開発において、ソーシャルワーカーが有する志向・信念等内面特性が、社会資源の開発という実践に重要な機能を果たしている。この志向を育む支援としては省察を深める演習や記録、物語るものが有効であり、多くの地域で実現可能な手法により実施することが重要であることを指摘した。

(4) 社会資源を開発するソーシャルワーカーは、共に取り組む仲間を増やし、機動力あるベースキャンプをつくる、【築く力】を発揮していた。ベース

キャンプとは、ともに取り組む地域住民や関係者からなる有機的な場であり、社会資源の開発に向けて、前向きな判断がくだされ、高い機動性をもつ。この場が、社会資源の開発までの道のりへの足がかりとなり、多様な社会資源を産み出していくしかけとして機能する。ベースキャンプをつくる方法のひとつは、自身が所属する組織で、他の専門職・職員とともに活動し、社会資源の開発の工程で、前向きな判断が下され、やりがいや楽しさを感じられる体験を共有しながら、このような特徴を備えるベースキャンプづくりを心がけていくことが肝要である。また、所属組織以外では、自らが地域で志を同じくする仲間を探し、つながっていくこと、既存の組織にベースキャンプ機能を付加していく場合には、リーダー的存在である地域住民等が活動しやすくなるよう下支えをしたり、後ろ向きの意見に対する調整を図るなどの役割を果たしたりすることによって、機動力のあるベースキャンプづくりに貢献していくことができる旨を指摘した。

(5) ソーシャルワーカーへの質的分析の結果、「『専門職としての自己』の着脱」という概念が見いだされた。これは、実践で出会う場面、相手、関係性に応じて自在になされるもので、これをなし得ること自体が、対人関係の構築によって実践の目的を果たしていくソーシャルワーカーに必要な能力である。専門職の鎧を脱いだ「隣人性」と「専門性」の往復は、専門職としての経験を重ねるなかで、柔軟に、無意識のうちに繰り返されているものであろうが、経験が浅い場合や地域住民や関係者との信頼関係を構築するうえで工夫が必要という場合には、このようなかかわり方を技能のひとつと捉えて意識的に行い、効果を振り返ってみるのが有効なのではないかという指摘を行った。また、本研究の質的分析の結果集約された「相談への迅速な対応」、「人を洞察」、「人としてかわる」といったコンピテンシーは、ソーシャルワーカーの実践のさなかに、例えば1日の業務の中でも場面に応じて次々と発揮されていくわけだが、「『専門職としての自己』の着脱」は、他のコンピテンシーの発揮に移動する際の動力となり、各コンピテンシーの発揮の効果を高めるといふ触媒機能を果た

しているものと考察した。

(6) 社会資源の開発の過程では、ソーシャルワーカーが地域住民の主体性を支えるのみならず、地域住民もまた、ソーシャルワーカーの実践を支援していた。このような相互の支援関係が生まれるには、仲間として、専門職としての信頼関係の構築が必須となる旨を考察した。

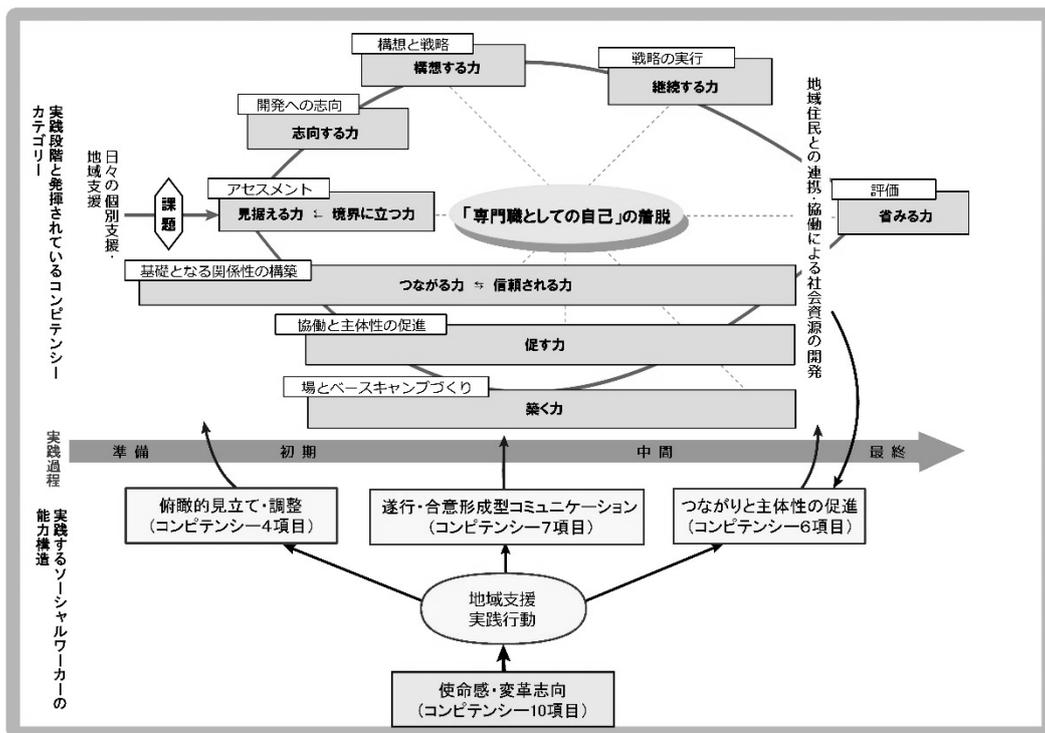
(7) 本研究によって明らかになった、地域住民との連携・協働により社会資源を開発するソーシャルワーカーの能力について、コンピテンシーとプロフェッショナルコンピテンスの関係図を図2のとおりまとめた。

(8) 能力向上の契機について、「就労者としての努力」が比較的強い影響を与えるという結果と、コンピテンシーの変化は、所属組織の影響が大きいとの結果を照合し、所属組織の目的を理解し自らの役割を果たそうとすることが能力向上に資すること、職場における支援の重要性を指摘した。

4 本研究の限界と残された課題

本研究の限界として、第一に、インタビュー調査の対象である地域住民について、ソーシャルワーカーが連携・協働している地域住民の属性が網羅できていたとは言い難いこと、第二に量的分析で設定した「社会資源の開発経験」について、今回設定した以外の要素の設定が求められていると解釈されること、第三に、本研究では、ソーシャルワーカーの能力に焦点をあてたが、社会資源の開発においては、組織・業務量・地域の資源の状況等様々な要因が影響するため、今後、その観点での研究も必要となることをあげた。

図2 地域住民との連携・協働により社会資源を開発したソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンシ統合図



筆者作成